

【絵巻「竹取物語」上巻第6段】

―蓬菜の玉の枝ほうらい たま え（車持皇子の話）―

五百日といふたつのこく辰ばかりに、うミの中  
に、わづかに山ミゆ、舟の内をなんせめて  
見る、うミのうへにたゞよへる山、いとおほ大  
きにてあり、其山のさま高くうるハし、是  
やわかもとむる山ならむとおもひて、さ  
すかにおそろしく覚えて、山のめぐりめぐり（川まわり）  
をさしめくらして、二三日計見あり歩  
くに、天人のよそほひしたる女、山の中  
より出きて、しろかねのかなまるを持て、  
水をくみありく、是を見て、舟よりお  
りて、この山の名を何とか申、ととふ、女こ  
たへて云、これハほうらいの山なり、とこたふ、  
これを聞に、うれしき事かきりなし、此  
女、かくのたまふハ誰そ、ととふ、我名ハほう  
かんるり、と云て、ふと山の中に入ぬ、その山  
をみるに、さらに上るへき様なし、其山のそ  
はひらをめぐれハ、世中になき花の木  
共たてり、金、しろかね、るりの色の水、山よ  
り流出たる、それにハいろくの玉のはし渡ながれいで  
せり、そのあたりに、てりかかやく木共立照  
り、其中に、此取て持てまうてきたりし  
は、いとわろかりしか共、の給ひしにたか違  
はましかは、と、この花を折てまうて  
来る也、山ハかきりなく面白し、世にた  
とふへきにあらさりしかと、此えたを折枝  
てしかは、更に心もとなくて、船にのりて、  
おひ風吹て、四百余日になんまうてき追  
にし、大願力にや、難波より、きのふ南都なんみやこ

にまうてきつる、更に塩潮にぬれたる  
衣脱替たにぬきかへなてなん、立まうてき  
つる、と、のたまへハ、おきな翁聞て、打嘆なけき  
てよめる詠

くれ竹の 世々のたけとり の山にも  
さやハわひしき ふしをのミ見し

是を御子みこきき聞て、こゝらの日ころおもひわ  
ひ侍つる心ハ、けふ今日なんおち落ゐぬる、と、のたま  
ひて、返し、

わかたもと袂 けふ乾かはけれハ わひしさの  
千草のかすも数 わすられぬへし

とのたまひ、かゝるほとに、男共六人つらねて、  
庭いできたりに出来、一人の男、ふは文さみ挟をはさみ  
て申、くもくもんむつかさ司のたくミ、あやへの  
うちまろ申さく、玉の木をつくりつかふ仕  
まつりし事五穀こ国をたちて、千余日に力  
をつくしたる事すくなからず、然しかるにろく禄  
いまた給はらす、是を給て、わろきけ（＝弟子）こに

給せん、と云て、ささけたる、竹取のおきな、此  
たくみらの申事ハ何事ぞ、とかた傾ふき

おり、御子ハわれにもあらぬけ気色しきにて、  
きえゐ給へり、これをかくやかぐやひめききて、

此奉る文をとれ、と云てミれハ、文に申ける  
やう、御子の君、千日隠いやしきたくみらと

もろとも同所にかく隠れゐたまひて、かし  
こき玉のえた枝をつくらせ給ひて、つか

さもたまはらむ、と仰給ひき、是を此ころ  
あんするに御つかひとおはしますへきか

くやひめのえうし給ふへきなりけり、と

うけたまわり

承て、此宮より給はらむ、と申て、給へき

たまわる

なり、といふをきゝて、かくやひめ、くるゝまゝ

におもひはひつる心ちわらひさかへて、

心地

おきなをよひとりて云やう、誠ほうら

蓬菜

いの木かところおもひつれ、かくあさまし

空

きそらことにて在ければ、はや返し給

へ、といへは、おきなこたふ、さたかにつくら

さだか

せたる物と聞つれは、かへさんこといとや

額

すし、とうなつきをり、かくやひめの心

ゆきはてゝ、ありつるうたの返し、

まことかと 聞てミつれは ことのはを

飾

かされる玉の えたにそありける

枝

といひて、玉のえたも

返しつ、

【絵巻「竹取物語」 上巻第7段】

―蓬菜<sup>ほうらい</sup>の玉<sup>たま</sup>の枝<sup>え</sup>（車持皇子<sup>くらもちのみこ</sup>の話）―

竹とりのおきな、さはかりかたらひつるか、  
さすかにおほえてねふりをり、御子ハたつ<sup>たつ</sup>  
もはした、ゐるもハしたにて居給へり、  
日の暮ぬれは、すへり出たまひぬ、彼<sup>かの</sup>う  
れへせしたくみをは、かくやひめよひす<sup>呼</sup>  
へて、うれしき人ともなり、といひて、ろ<sup>ろ</sup>  
くいとおほくとらせ給ふ、たくみらいミし  
くよろこひて、おもひつるやうにもある  
かな、と云て、かへる道にて、くらもちの御子、  
血<sup>ち</sup>のなかるゝ迄調<sup>うちしらめ</sup>させたまふ、ろくえし<sup>得</sup>  
甲<sup>あ</sup>斐<sup>ひ</sup>もなく、皆とり捨させ給ひけれハ、に<sup>逃</sup>  
けうせにけり、かくて此御子、一しやふの<sup>生</sup>  
はち<sup>恥</sup>、是に過るハあらし、女を得すなり  
ぬのミにあらず、天下の人の、おもはん事  
のはつかしき事、とのたまひて、たゝ一  
所、ふかき山へいり給ぬ、宮つかさ、さふらふ<sup>候（侍）</sup>  
人く、皆手をわかちてもとめ奉れ共、  
御死にもやしたまひけん、得見つけ奉ら  
す成ぬ、御子の御供にかくし給ハんと  
て、年頃見え給ハ  
さりける也、  
是をなん  
玉さかるとは  
いひはしめ ける

※たまさかる（魂離る）：魂が抜けたように、正気を失ってぼんやりする。